松江市坂本町澄水寺跡の再検討

林　　健　亮

1．はじめに
2．澄水寺跡の概要
3．澄水山周辺の遺跡・寺社
4．澄水山の状況と澄水寺
5．往生院跡とノージャエン・勘助庵
6．まとめにかえて

1．はじめに

松江市坂本町の澄水山（しんじさん507.3m）山頂近くには澄水寺（ちょうすいじ）と呼ばれたお寺の跡が知られている。澄水寺は出雲三十三所観音巡礼の第二十五番札所として、近世後半には特に栄えたが、明治7（1874）年に本尊の木造千手観音菩薩立像が麓に降ろされ、山頂部の伽藍は廃寺となった。現在では、福原集落の曹洞宗長慶寺境内に観音堂を残している。

一方、澄水山への登山口のある坂本町から福原町にかけては、平安時代のものと言われる軒平瓦・軒丸瓦などが採集された坊床廃寺、須恵器・土師器や平瓦が採集された往生院跡と呼ばれる遺跡が知られている。これらの遺跡は、別々の遺跡として捉えられてきたが、坊床と言う地名や往生院という坊院の名が示すとおり、それらは一体の山の寺だった可能性はないだろうか。

ここでは、別々の遺跡として紹介されていた澄水寺跡・坊床廃寺・往生院跡での採集遺物を再掲し、広い範囲に展開する澄水寺跡を概観する。また、併せて故恩田清氏収集資料に含まれていた坊床廃寺資料を紹介したい。

2．澄水寺跡の概要

澄水寺跡は、松江市坂本町の澄水山頂から南にやや下がった場所に位置する。

澄水寺は、『出雲稽古知今図説』(註1)に「古は坊舎三十余坊」と記されるほどに栄えたが、『出雲札所観音霊場記』(註2)に「天正年中の兵乱に寺坊皆焼失し今に残る所は只円通堂並びに朝比奈の廟五輪のみ現存せり」記されるとおり、一時衰亡した。近世後半には出雲三十三所観音巡礼の第二十五番札所として栄えたが、明治7（1874）年に、本尊の十一面千手観音菩薩立像が麓の長慶寺に降ろされ、山頂部の伽藍は廃寺となっている。

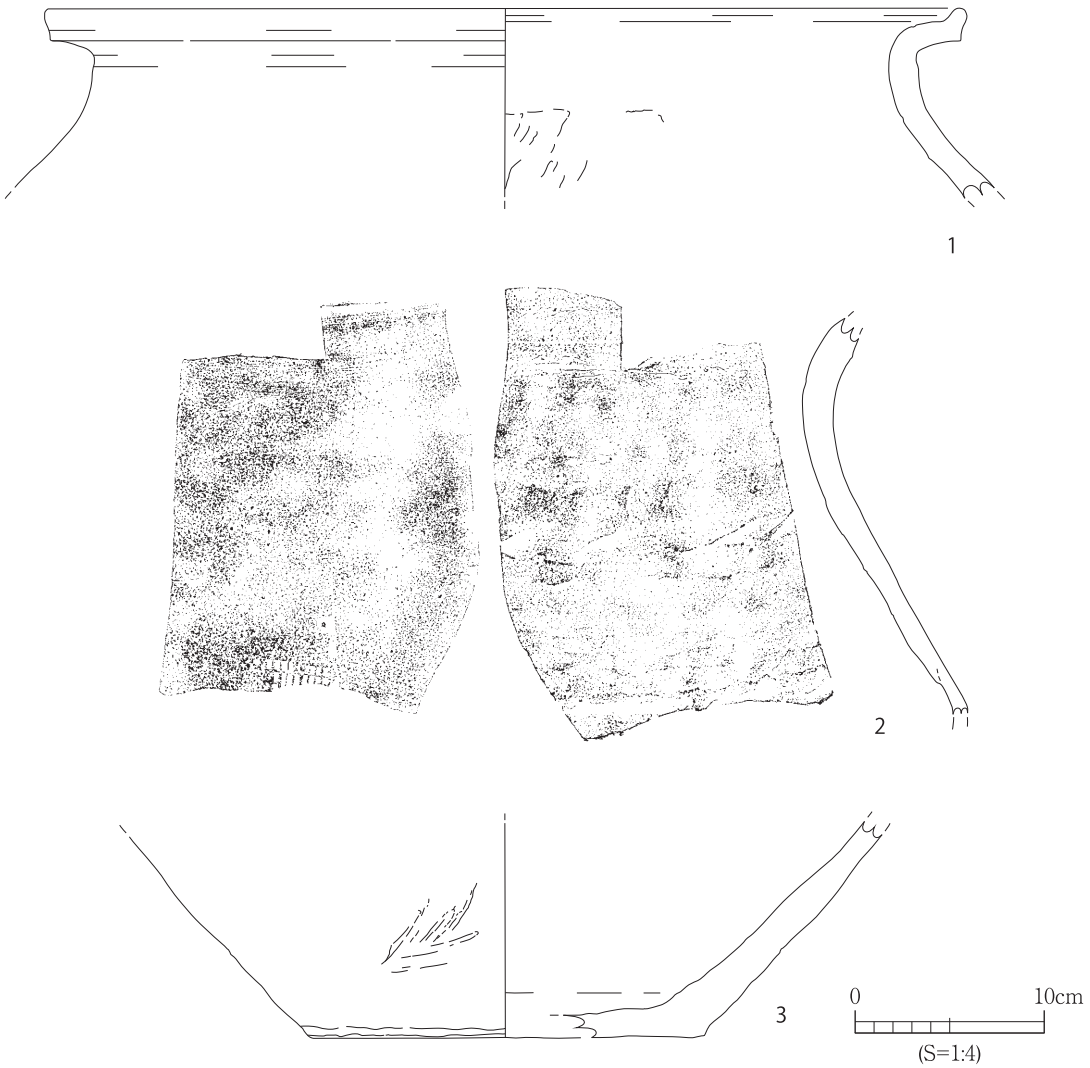
「澄水寺」は、昭和28年に刊行された『持田村誌』(註3)に詳しい記載が見られ、また、昭和38年の『島根県遺跡目録』(註4)には「長水寺跡」として記載されている。

明治7年に麓に降ろされた木造千手観音菩薩立像は、松江市福原町の曹洞宗長慶寺境内の澄水寺観音堂に祀られている。この木造千手観音菩薩立像は、頭頂部に10面の小仏面を戴き、42手を持つ。11世紀頃の制作(註5)と考えられている。

近世に盛んに行われた出雲三十三所観音巡礼では、澄水寺は二十五番札所となっており、巡礼者は、松江市大庭町にある二十四番札所の浄音寺から北上し、上坂本集落からの登山道(註6)を登る。澄水寺の後、巡礼者は、西持田の二十六番札所小倉寺へ向かった。

澄水寺への登山道は、前述の上坂本集落から登るルートの他、加賀別所から登るルートがあり、両ルート沿いには一丁地蔵が残されている。また、北山の尾根筋には、縦走する林道があり、東に向かうと三坂山を経て枕木山華蔵寺を結んでいる。一方、現在は荒れているために通行禁止となっているが、福原町の虫野神社横から登るルートがある。このルートは、虫野神社西側から山中に入り、往生院跡を経て登るルートで、一丁地蔵などは見られないが、山中にはいくつかの小規模な平坦面が残される。

第１図　澄水寺跡と周辺の遺跡・寺院・神社（S=1:25,000）（国土地理院発行 1/25,000加賀・境港）

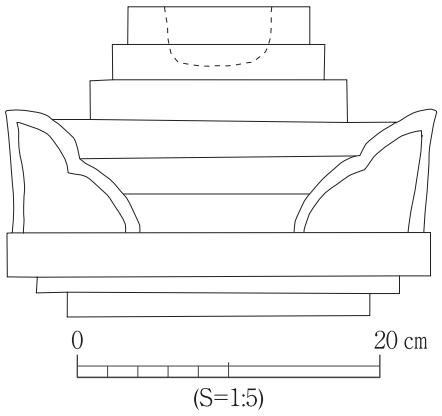


第２図　澄水寺跡採集遺物実測図（S=1:4）

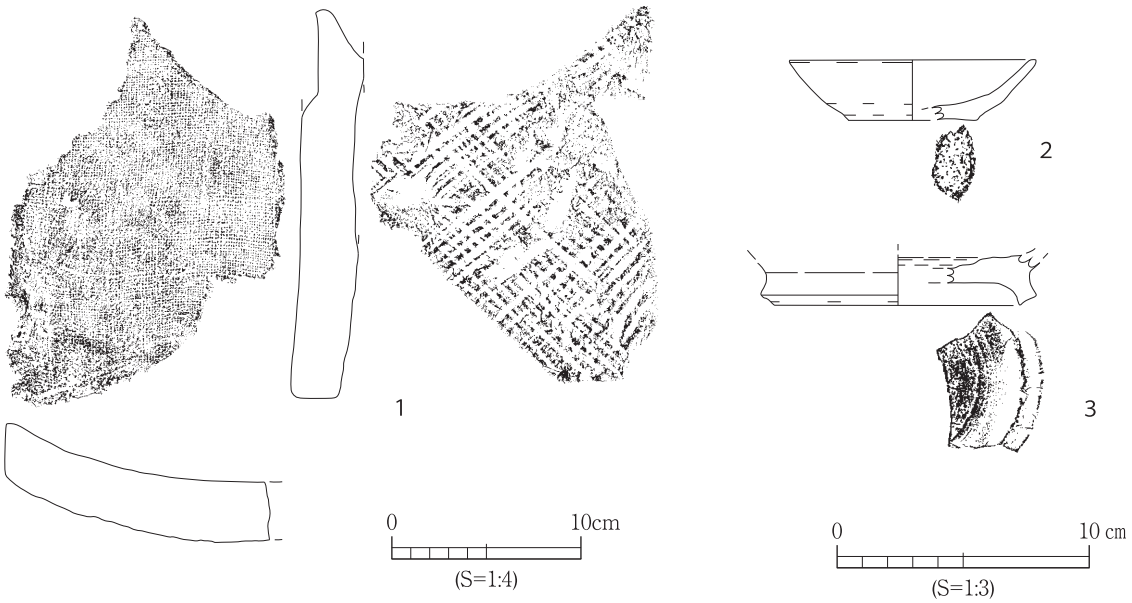
澄水山山頂に近い澄水寺跡と呼ばれる場所は、明治７年まで存続した本堂を中心とする施設群で、平成10年に岡崎裕二郎氏らが踏査[註７]し、本堂跡や墓とみられる基壇などが明瞭に残されていた。その状況は、現在でも変わりないはずだが、付近は竹が密集し、全く見通せる状態になく、全体像を把握することはできない。明治７年に存続していたと思われる建物基壇や墓所と思われる基壇、無縫塔や手水鉢などの石像物が残されている。

また、平成10年には、蔵骨器に使用されたと思われる陶器大瓶や土師質の甕などが採集されており、松江市教育委員会に保管されている。第２図には、当時、常滑と推定されていた大甕を図示した。図示した以外にも破片があるが、全て同一個体と思われ、越前[註８]であろう。また、土師器の甕とされていたものは近世以降の素焼きの骨壺と思われた。

澄水寺跡から登山道をしばらく上がると、頂上に近い尾根に達し、「勘助庵」の石碑が建つ。勘助庵跡については後述するが、そこで登山道を外れ、しばらく斜面を登ると、標高507mの山頂に着く。山



第３図　澄水山頂宝筐印塔実測図（S=1:5）



第４図　往生院跡出土平瓦・土師器・須恵器実測図（平瓦S=1:4、土師器・須恵器S=1:3）

頂部には、日引石製と見られる小型の宝筐印塔（第３図）が残されていた。

山頂部に残されていた宝筐印塔の部材は傘部のみで、高さ24㎝、幅28㎝で、上面に相輪部を繋ぐ深さ４㎝の掘り込みがある。段は５段がしっかりと残り、下側にも２段が作られている。下面は平らで掘り込みはない。なお、山頂周辺を探したが、他の部材は見当たらなかった。

日本海に面した加賀別所から上るルートは、標高300m付近まで車が通る林道が通じており、道路脇には何基かの一丁地蔵を見ることができる。林道の終点からは、御手洗の滝に向かう山道と山頂方面に向かう登山道に分かれる。山頂へ向かう道には、所々に一丁地蔵が残されており、平坦面が点在している。一方、御手洗の滝へは、２箇所で沢を越えて、滝とその上方の滝の観音堂へ通じるもので、道はしっかりしているが、一丁地蔵は見られない。道は、滝と観音堂が終点となっており、観音堂より上に向かう明確な道は残されていない。

３．澄水山周辺の遺跡・寺社

往生院跡　澄水山麓で坊床廃寺のある坂本集落より東の福原町に『出雲国風土記』の虫野社に比定される虫野神社（第１図12）が位置する。その虫野神社北西側山中には、広い加工段や基壇状の石組み、石塔残欠などがある。付近での砂防ダム建設時には土師器坏などが採集[註9]され、松江市教育委員会に保管されている。この遺跡を紹介した岡崎雄二郎氏は、現地での聞き取りにより、澄水寺開基の往生された庵で、往生院と呼ばれたとし、現在の遺跡地図には往生院跡と言う名称で記載されている。往生院跡の近隣で採取された遺物には、須恵器・土師器の他、平瓦１点が含まれている。

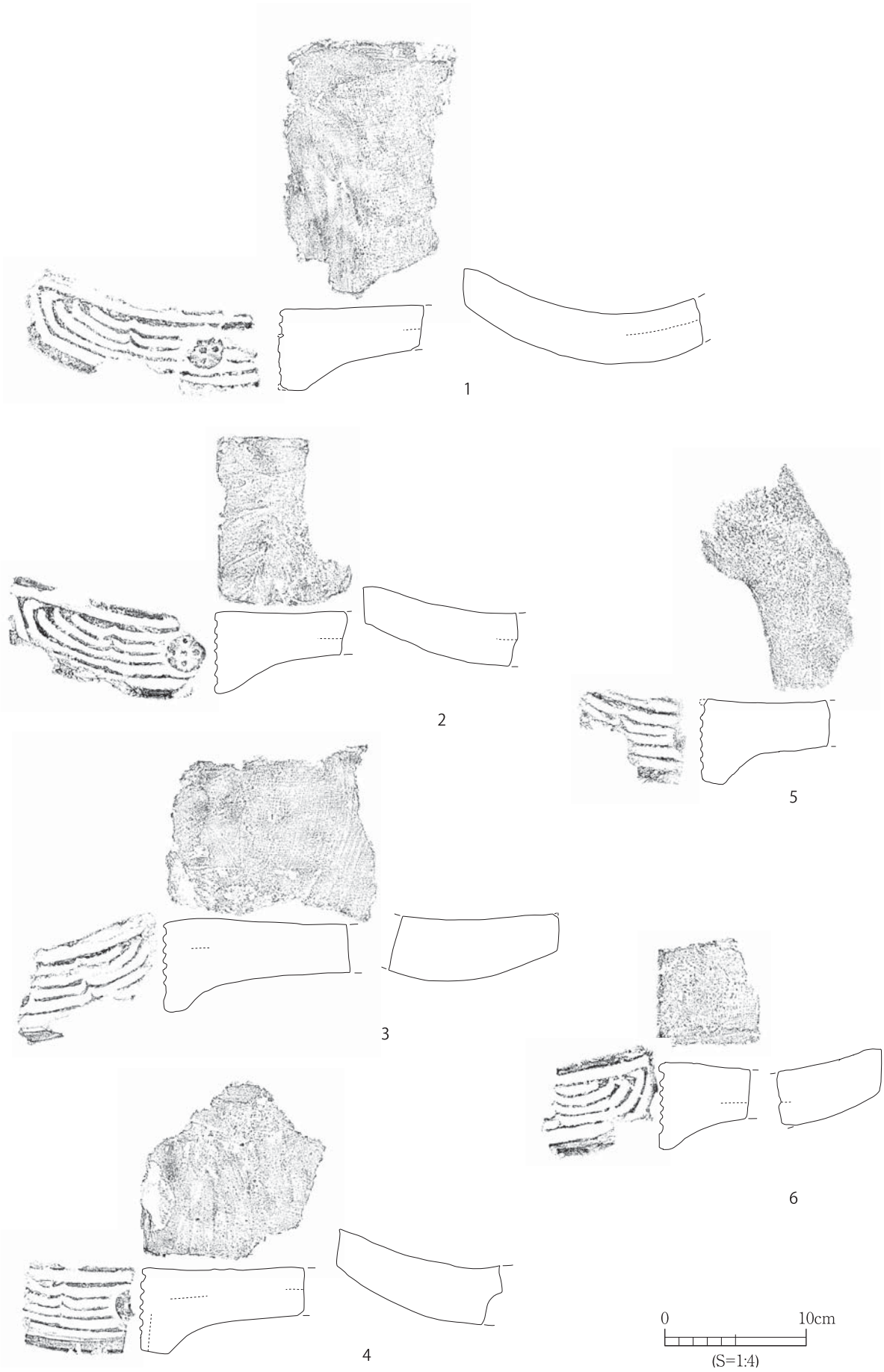
平瓦（４－１）は、凸面にヘラ状工具による斜格子文を施すもので、タタキ痕は見えない。凹面は布目圧痕。端部・側部とも鉛直方向に調整され、凹面側を小さく面取りしている。弧芯が浅く一枚作りと思われる。やや酸化炎気味に焼成され、灰白色を呈す。凸面にヘラ状工具で斜格子を施す平瓦に似たものは、出雲国分寺跡５型式軒平瓦[註10]があり、雰囲気はよく似ているが、出雲国分寺跡５型式軒平瓦は、ぼそぼそとした特徴的な胎土であることが知られており、同じものではないだろう。

坊床廃寺　坊床廃寺（第１図６）は澄水山麓の上坂本集落にあり、澄水寺登山道に隣接する。発掘調査はされていないが、平安時代のものと言われる軒平瓦・軒丸瓦などの瓦類の他、延喜通宝を入れた壺が発見されており、それらの遺物については、『島根

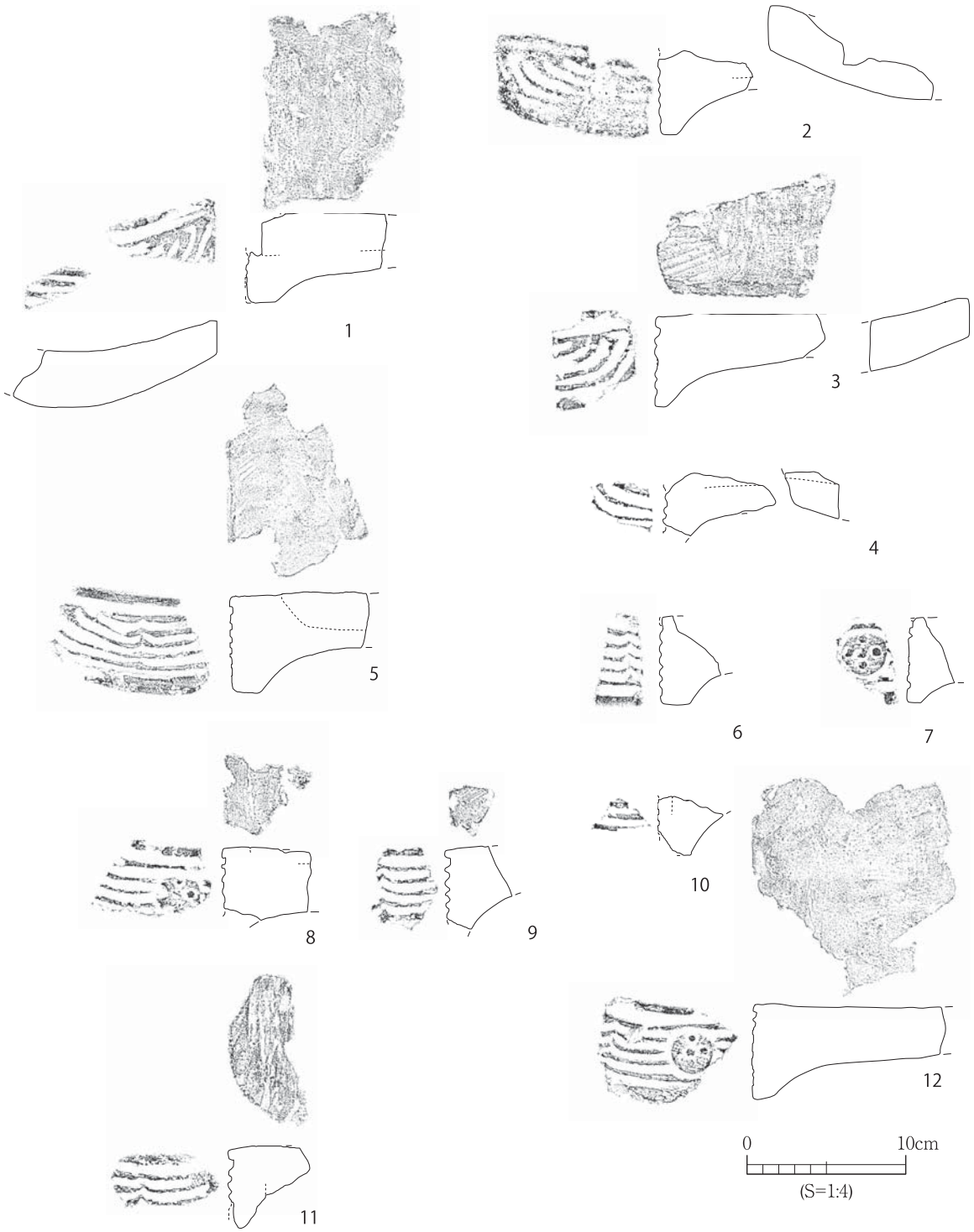
第 5 図　坊床廃寺軒丸瓦実測図（S=1:4）

県埋蔵文化財調査報告書第 3 集』(註11)『菅田考古』(註12)と西川津遺跡の発掘調査報告書に紹介されている(註13)（以下、西川津遺跡資料と呼ぶ）。現在、その時の遺物を納めたとみられるコンテナが、島根県埋蔵文化財調査センターに収蔵されているが、そのコンテナには、掲載されている資料以外にも多くの瓦類や土器が含まれていた。また、故恩田清氏が収集された資料（以下、恩田資料と呼ぶ）の中にも坊床廃寺採集遺物が含まれており、その数量が報告(註14)されているが、詳細は不明だった。この度、それらの多くを実測したので、未報告の資料を紹介する意味で、できだけ多くの資料を掲載し、文末の観察表に資料の所属を示した。なお、西川津遺跡の発掘調査報告書に掲載されている延喜通宝とそれが入っていた須恵器壺については、島根県埋蔵文化財調査センターに納められているコンテナ内には見当たらず、実測することができなかった。

第 5 図は軒丸瓦。西川津遺跡資料に 6 点があり、



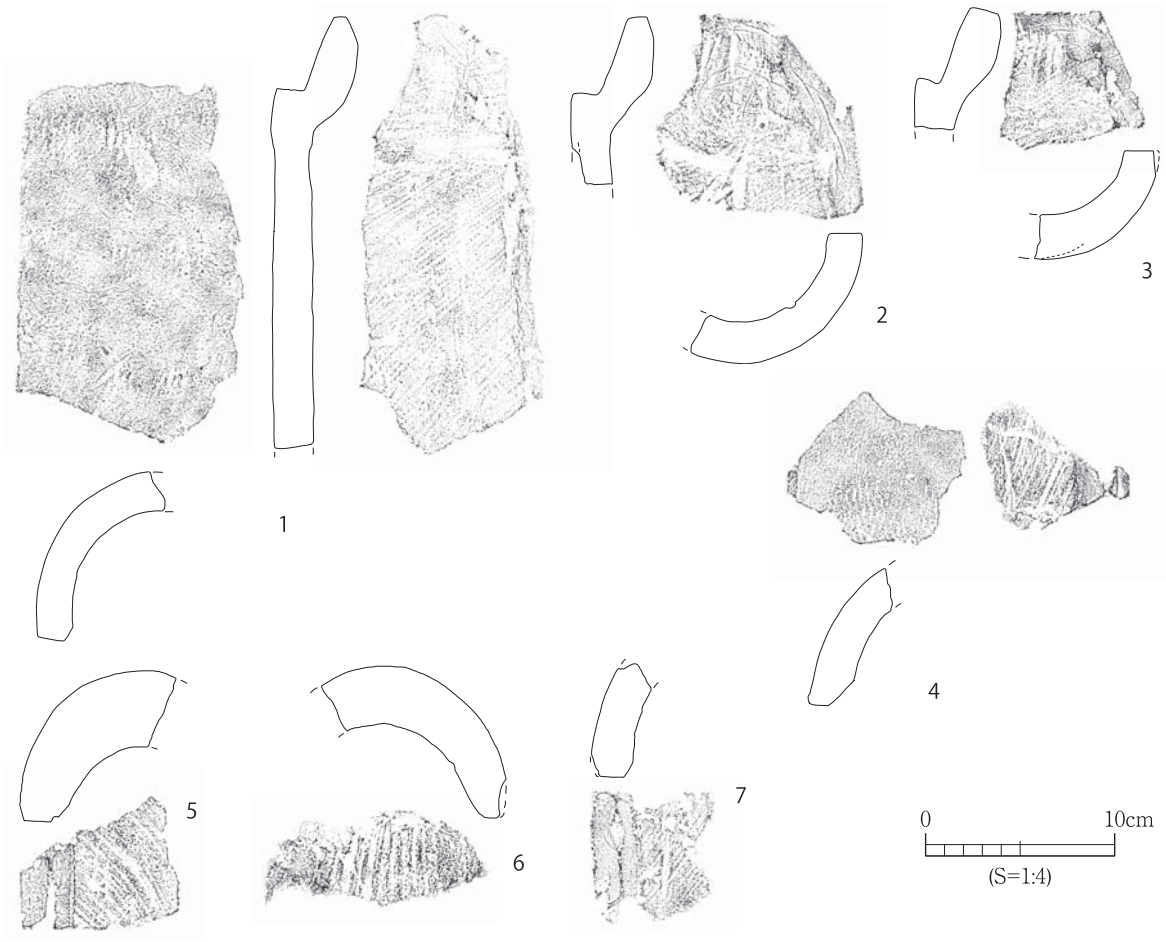
第６図　坊床廃寺軒平瓦実測図(1)（S=1:4）



第７図　坊床廃寺軒平瓦実測図(2)（S=1:4）

恩田資料にも１点があるが、この１点には瓦当面が残存していない。５－１・３・４・５は、『菅田考古』『西川津遺跡』に掲載されているもの。外区の圏線が一重のもの（５－１・４・５）と二重のもの（５－２・３）の２種がある。二重圏線の軒丸瓦も後の紹介する文様（10－10）の状況から、主文様は同文であろう。

５－１はほぼ全形の判る資料。単弁八葉蓮華文で、１＋４の中房の周囲に幅のある突線で柳葉形の蓮弁を配している。笵のずれが明瞭に残る。丸瓦部凹面の布目圧痕は瓦当裏面に連続しており、横置き一本造り。中房の周囲には木目が見えるものがあり、５－１・５には、横方向に近い角度で笵の割れが確認できる。



第８図　坊床廃寺丸瓦実測図（S=1:4）

５－２・３は瓦当部の小片で、外区の圏線が二重にめぐるもの。瓦当面の低い部分にわずかに布目状の圧痕が見える。瓦当面の高い部分には布目状の圧痕が見えないことから、瓦笵に布がかぶせられていたのではなく、瓦笵に押し当てる前の粘土側に布目が付いていたものであろう。瓦当面に布目状の圧痕が確認できる資料は、２重圏線のもののみ。

５－４は、瓦当部分の小片。瓦笵のずれが目立つ。瓦当裏面に布目圧痕。５－５も瓦当裏面に布目が続く。

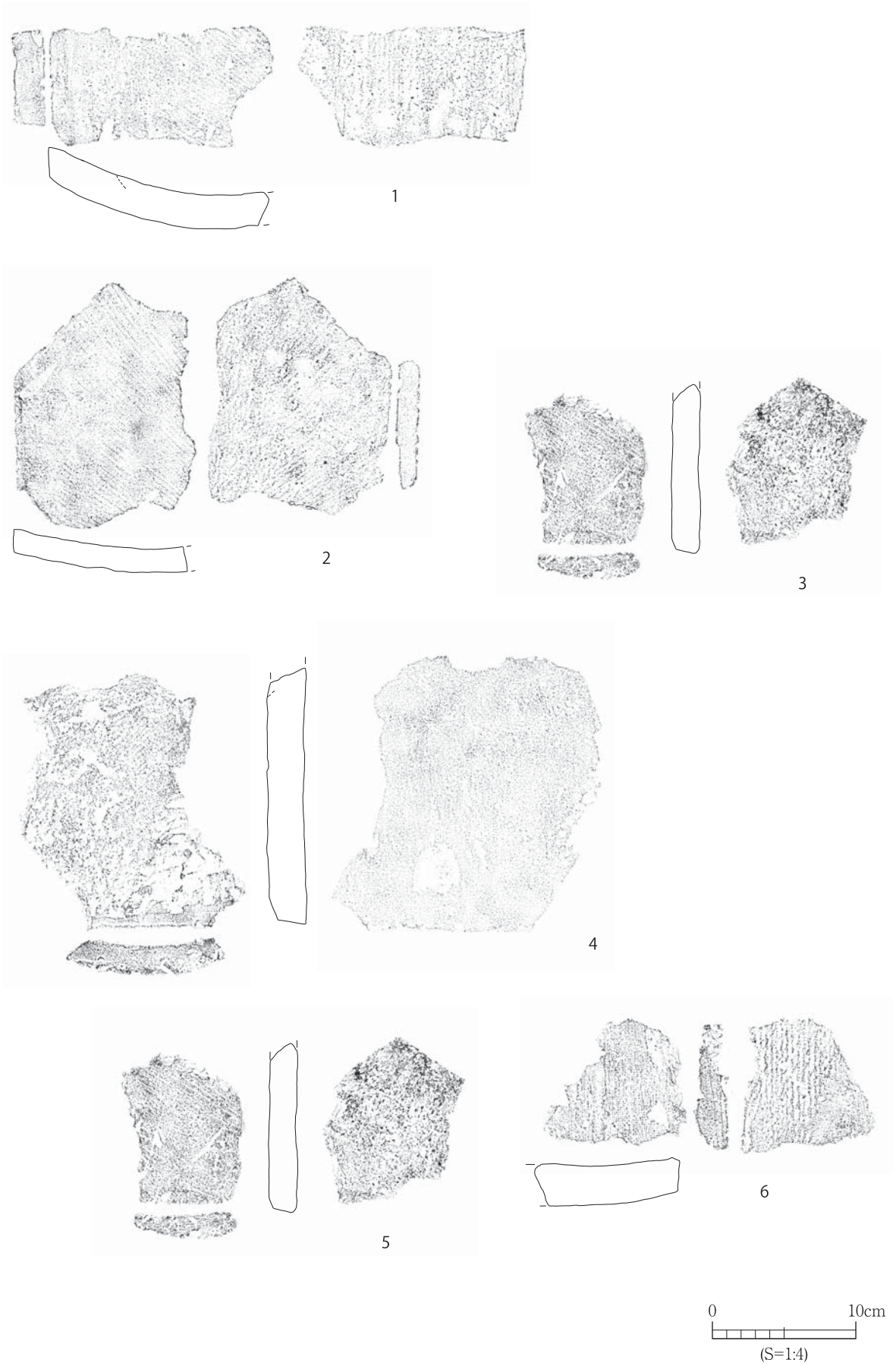
５－６・７は瓦当部を欠くもの。５－７の瓦当裏面にはヘラ状工具による押さえ痕が残る。

第６・７図は軒平瓦。西川津遺跡資料に13点、恩田資料に６点あり、いずれも同文で同笵と考えられる。『菅田考古』には２点の軒平瓦が掲載されているが、瓦当面の左右両端まである大きな破片は、個体を特定できなかった。接合が外れているか。６－２は『菅田考古』『西川津遺跡』に掲載されているもの。

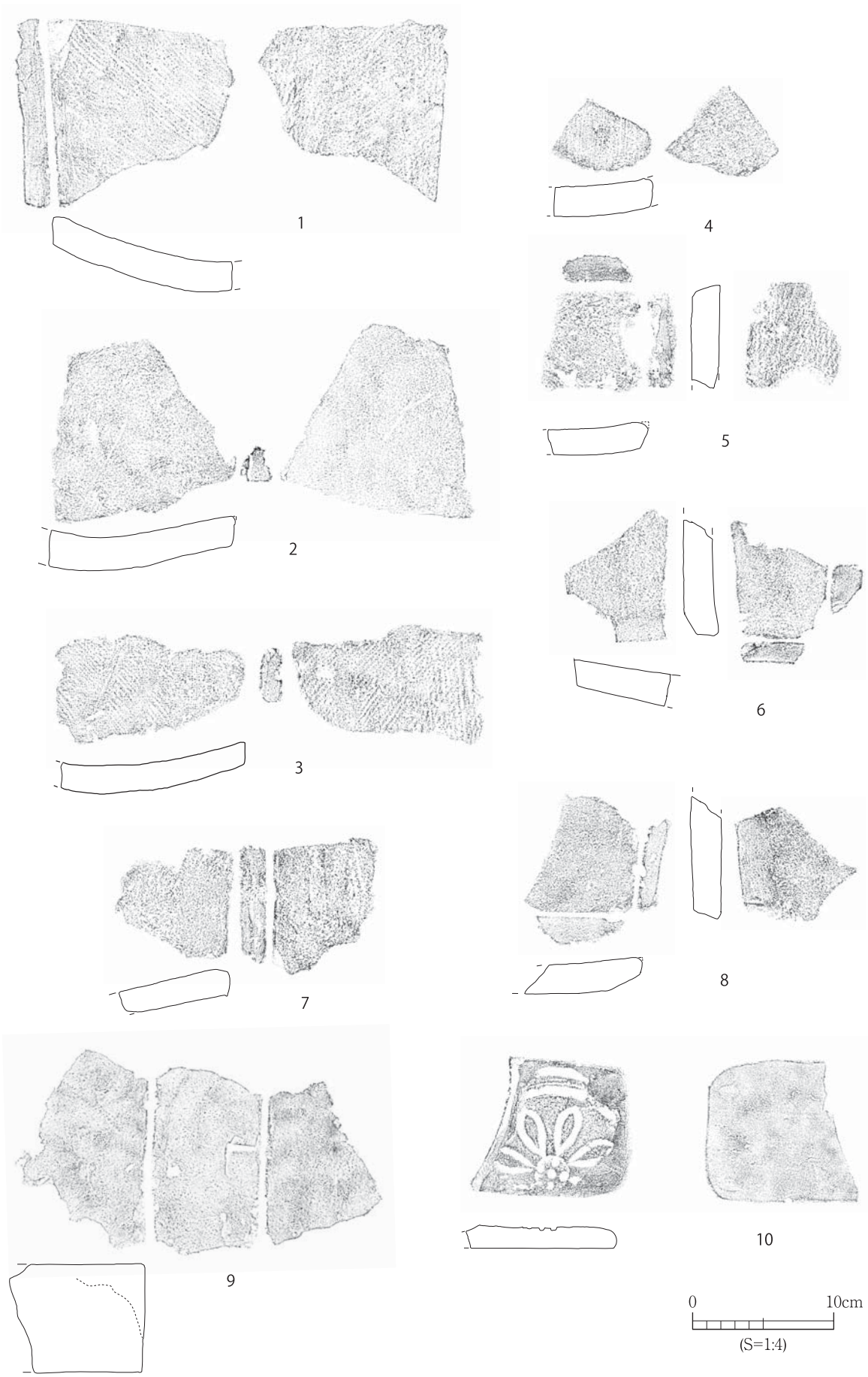
軒平瓦はいずれも同文で、同笵であろう。中心飾りに軒丸瓦中房と同様の１＋４の文様があり、四重の波線が左右に伸びる。外区は素縁。６－５の波線の文様が多く見えるのは、笵のずれによるもの。７－７は中心飾周辺の小片で、笵の木目が目立つ。

第８図は丸瓦。狭端部の形状が判るものはすべて玉縁式。いずれも、側部は凹面側を面取りする。８－１・４は、凸面に縄目タタキの痕跡を残している。８－５は、軒丸瓦の可能性があり、側部凸面側にも小さく面取りが見られる。８－６は、凹面の布目圧痕が絞られており、狭端部に近い部位か。

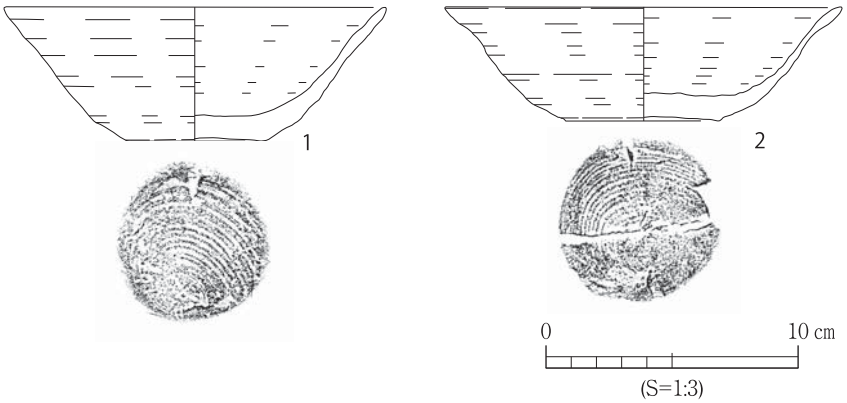
第９図と10－１～６は平瓦。いずれも弧深が浅く、端部が鉛直方向を向くことから一枚造りであろう。側部・端部とも凹面側を面取りする。10－５を除き凸面にハナレ砂が使用されている。９－１・２・５・６、10－１・３・５は縄目タタキが残るが、10－２は無文タタキの可能性がある。９－２は隅切り瓦。



第 9 図　坊床廃寺平瓦実測図（S=1:4）



第10図　坊床廃寺平瓦実測図（S=1:4）



第11図　坊床廃寺土師器実測図（S=1:3）

広端部側の１隅を斜めに割り取っている。

10－７・８は故恩田清氏採集資料に含まれていた瓦であるが、凹凸面ともナデ調整されるもので、近世以降の平瓦か。

10－９は敷塼。断面に接合痕が見え、側面に型の圧痕が残る。出雲国分寺跡の塼に似ている。故恩田清氏採取資料のコンテナにビニール袋に入れられて収められていたが、「国分寺？」と書かれた付箋が張られていた。他の資料の保管状況から、恩田氏宅から埋蔵文化財調査センターに持ち込まれて以降に張られた付箋と思われるが、国分寺資料の混入と見られるものか、それとも、国分寺資料に似るという意味なのかは不明。

10－10は文様塼。幅約10㎝の隅丸方形と思われるが、１辺を欠く。単弁八葉蓮華文のネガティブの文様が入っており、２重圏線の軒丸瓦を押しつけたと思われる。軒丸瓦の文様にかぶって、大きな弧の文様で破損しているが、この先の文様は軒平瓦だろうか。

土器類は、西川津資料に土師器坏２点、恩田資料に須恵器長頸瓶の頸部と思われる小片のほか、両資料に須恵器甕の胴部の小片が含まれている。須恵器類に関しては、いずれも小片のため実測しなかった。

第９図は坊床廃寺採集瓦類を納めた西川津資料のコンテナに入っていた土師器坏である。２点ともバラバラに壊れているが、完形近くまで復元されている。コンテナ内に別のタッパーに入れて納められていたもので、これについての注記やメモはなく、『菅田考古』『西川津遺跡』報告書にも記載が見えないことから、間違いなく坊床廃寺採集試料とする確証はない。

土師器坏は２点ともほぼ同形で、底部に回転糸切り痕を残し、小さい底部から大きく開く体部が直線的に伸び、口縁部近くでわずかに外反する。出雲国府跡の第９型式[註15]にあたり、出雲国府跡では11世紀後半から12世紀前半に位置付けられている。また、延喜通宝とそれを納めた須恵器壺を実見することはできなかったが、須恵器壺は９世紀代のものと思われる。

坊床廃寺の資料には、敷塼や土師器坏など、所属の疑わしいものも含まれてはいるが、見ることのできなかった須恵器壺を含め、平安時代には瓦を葺いた建物が存在したと考えられる。

澄水山周辺の神社・遺跡　澄水山麓の福原町には虫野神社が、坂本町には比加夜神社があり、『出雲国風土記』には「虫野社」「比加夜社」が見える。いずれも風土記の時代の社地が判明している訳ではないが、澄水山の登山道沿いには、巨石が点在しており、こうした巨石が元の社だった可能性はないだろうか。『出雲国風土記』では澄水山は毛志山であり、その麓に位置するのが、「もしやま」に通じる虫野神社であることから、当時の人々が、毛志山＝澄水山を神聖な山と認識していた可能性は高い。

この他、周辺では奈良時代の豪族居館などと推定される芝原遺跡、須恵器多嘴瓶や灯明皿型須恵器などを出土した東前田遺跡、荷札木簡などを出土した大谷口遺跡、須恵器托や平瓦片などを出土した中嶺遺跡が調査されており、末端官衙や仏教に関係する遺跡の存在がうかがわれる。東前田遺跡、大谷口遺跡、中嶺遺跡は同時期に隣接して存在しており、また、朝酌川を挟んで対岸の芝原遺跡も同時期に存続してはずである。これらの遺跡がまったく無関係に存在したとは思えず、また、澄水山を望める位置に存在する点は示唆的である。

枕木山華蔵寺　澄水山から尾根上に整備された林道を東へ向かうと、三坂山を経由し約４㎞で枕木山（標高456m）山頂に続く。枕木山山頂周辺には華蔵寺が法灯を伝えている。華蔵寺は、現在は臨済宗だが、元は天台宗の山岳寺院で、山頂周辺の本堂、薬師堂の他、やや下った位置に県下最大級の磨崖仏である不動明王像や仁王門が、更に下った場所に地蔵堂があり、山頂周辺の広い範囲に伽藍が展開していたことが判る。

華蔵寺は、臨済宗となった華蔵寺の縁起(註16)によれば天長二（825）年に智元上人の開基による天台宗の寺院で、枕木十二坊があったとされる。鎌倉期に退転し正安年間（1299～1301年）に臨済宗の寺院として再興したと伝わる。縁起には、澄水寺・仏道寺（詳細不明）の僧徒と杉井の水（華蔵寺境内の湧水か）を巡って闘争したとされるなど、澄水寺との関わりが記されるほか、天狗にまつわる伝説も記され、山林修行の寺であったことが判る。華蔵寺には、重要文化財に指定される薬師如来像を始め、平安期に遡る多くの仏像が残され、さらに、蔵王権現や熊野権現などの密教に関わる仏像が多く伝えられている。

４．澄水山の状況と澄水寺

『出雲稽古知今図説』や『出雲札所観音霊場記』(註17)には、近世の澄水寺の様子が伝えられている。

『出雲稽古知今図説』には、「古は坊舎三十余坊と云今は本堂のみ残れり」「本堂の艮の方に秀郷の廟あり」とあり、本堂の東北方向に開基とされる人物の廟があると記される。『出雲札所観音霊場記』には、更に詳しく、「坂十八丁登り山の半腹に有し伽藍なり」「坊院僧侶数多有」「楼門二王門其外数々有」「天正年中の兵乱に寺坊皆焼失し」「今に残る所は只円通堂並に朝比奈の廟五輪のみ現存せり」「滝有り此所も児が滝といふ也又滝の観音ともいふ也」などとある。

一方、『島根町誌　資料編』(註18)には、島根町側に伝えられた伝承等を掲載しているが、その中に、御手洗の滝を始め、澄水寺に関係する記載が複数見られる。それによると、坂本から澄水山を越えて加賀別所に至る道が「殿様街道」と呼ばれ、加賀別所から一丁地蔵が置かれていたことなどの他、勘助夫婦に関する記載がある。勘助は、澄水寺の庵に大正頃まで住んだ山守とされる。

『出雲札所観音霊場記』に記される児が滝は、澄水山頂から北西に約１㎞の位置にある御手洗の滝のことであろう。現在も明治14年の銘がある来待石製不動明王像が祀られている。この滝の上、約200mほどの場所に小さな平場があり、菩薩形像を納めた滝の観音堂が残されている。本尊の菩薩形像は、像高50㎝ほどと小型で江戸時代(註19)の作と見られる。現地は20m四方ほどの平坦面に小さな観音堂と、火袋を欠いた２基の来待石製灯籠、石塔残欠などが残されているが、石造物は明治。石州瓦を葺いた観音堂は昭和になって改修されたものである。この御手洗の滝や滝の観音堂からは、現在では、直接山頂方面へ向かう道はなく、尾根筋を北へ降りた加賀別所側に位置している。御手洗の滝から北へ流れる川は澄水川と呼ばれ、加賀別所から日本海に注いでいる。

５．往生院跡とノージャエン・勘助庵

『出雲札所観音霊場記』などの記載を受けて、『持田村誌』には「本堂の跡から艮の方角百三十間ばかりの所に俗に「お墓」といはれるところがあつて」「開基の墓であつた所であろう」「岩の尾根つづきに一寸した平地があって、俗にノージャエンといひ、即ち往生院のなまつたもので、往昔ここに開基が往生されたという庵があつた。この庵は久しく庵守がいて、明治初年頃まで続いた」と記している。現在、往生院跡と呼ばれている遺跡は、福原町の虫野神社の北西に位置しており、澄水山山頂近くの本堂跡からは、南東方向に約１㎞の位置にある。『持田村誌』の言う「艮」に「百三十間」とは、方角、距離共に異なる。明治初め頃まで「庵守」がいたとされているが、『島根町誌』に記される「勘助」の説明が思い起こされる。現在、勘助庵とさえる場所は、頂上に近い尾根筋にあり、本堂跡から北にしば

第12図　澄水寺跡とその周辺の状況（S=1:25,000）（国土地理院発行 1/25,000加賀）

らく行った場所にあたり、勘助庵跡の石碑とL字形造成された平坦面が残されている。『島根町誌』の「勘助庵」の記載は、『持田村誌』の「ノージャエン」の記載に通じているように思え、現在「往生院跡」と呼ばれる遺跡が、往生院ではない別の名前の坊院だった可能性はないだろうか。

ところで、『出雲札所観音霊場記』には、澄水寺の山号を「不老山」とし、鰐淵寺との共通点を列記しているが、『雲陽誌』では山号は「清水山」と見え、「加賀浦」に、「浮浪山」の山号を持つ別の寺が記される。この寺は、「瀧観音」、つまり、龍王権現を祀る社とともにあったと見られる瀧の観音堂のことである。近世になってからの澄水寺とその坊院の関係は判らないが、分離・集合を繰り返していたか。

『持田村誌』には、この澄水寺の記載に続いて、坊床廃寺などを紹介しているが、その中で、坂本集落から峠を越えた西側の納蔵集落にも「遠城寺」「寺床」「鐘撞堂」「御古堂」などの地名が残されている[註20]ことを記している。これらの地名についても澄水寺の末寺・僧坊の跡と推定されており、澄水

寺の旧境内が坂本・福原のある南斜面から納蔵集落のある南西斜面、また加賀別所のある北斜面までの、澄水山全域にわたる広大な範囲に展開していた可能性をうかがわせる。

6．まとめにかえて

澄水山麓に位置する坊床廃寺、往生院跡はいずれも澄水山への登山道に接しており、澄水山中の澄水寺が無関係ではないことは明らかである。坂本町の坊床廃寺では、平安時代には瓦を葺いた建物があり、確実な資料とは言いがたいが、恩田資料には出雲国分寺跡とよく似た塼や瓦が見られる。また、福原町の往生院跡でも平安期に遡る可能性のある瓦が採集されている上、奈良時代に遡る遺物も見られる。これらの遺跡が、大規模な古代寺院だったとは思えないが、澄水山や御手洗の滝などで行われた山林修行の拠点として出発した山林寺院だったのではないだろうか。そうした山林寺院が、後に天台・真言などの宗派に組み込まれることによって、山中に伽藍を展開する中世の山の寺へと発展し、さらに、近世の澄水寺へと続いたと想像できる。

古代の仏教が、平地に存在する寺院だけで完結したのではなく、様々な形態の仏教に関わる施設があり、多くの僧尼が山林修行を行っていたであろう事は、すでに先学による多くの指摘(註21)がある。当時の僧尼が「白月は山に入り、黒月は寺に帰る」といわれるように、平地にある寺院と山林修行の場を行き来していた事が知られつつある。こうした山林寺院は、久保智康氏が指摘(註22)しているとおり、『出雲国風土記』記載の社がある山を神聖な場として認識し、山林修行の適地に選び、それが後の山の寺に発展していった様子が想定される。澄水山の場合は、『出雲国風土記』記載の「虫野社」が置かれた「毛志（もし≒むし）山」であり、虫野社の神宿る山そのものが澄水山だったと考えられる。同様の例は、久保智康氏が紹介された以外にも、「楯縫郡」乃利斯社・見椋山の高野寺跡、「意宇郡」由宇社社・玉作山と金比羅宮、布吾社と岩屋寺跡、「大原郡」布須社・御室山と伝御室山寺(註23)など、多くの例があり、検討していく必要があろう。また、澄水寺周辺にも大倉山（枕木山）に華蔵寺が、また、小倉山（大平山）関係する小倉寺が建てられるなど、『出雲国風土記』記載の多くの山々が神聖な場と認識されていた可能性もある。

ところで、天平五（733）年の年記を帯びる『出雲国風土記』には「新造院一所」で始まる記述があることが知られている。新造院は、意宇郡条では「教昊寺」に続いて記され、僧尼の有無や塔・権堂などの記載が続くことから、寺と考えられる事が多く、『出雲国風土記』の時代の出雲地方には、「教昊寺を始めとする11ヶ寺があった」と説明されることが多かった。私自身も例外ではなく、新造院を寺と考えるのは一般的である。寺ではなく「新造院」と記される理由については、古代史の立場から、いわゆる「寺院併合令」との関係などで説明される事が多かった。一方、考古学の立場からは、新造院比定地に、七堂伽藍を整えた典型的な伽藍配置を持つ寺跡が確認できておらず、733年時点で、確実に瓦を葺いている事が確認しづらい新造院比定地があるなど、新造院跡が必ずしも一般的な古代寺院跡と同じものとは限らない可能性をうかがわせている。多くの写本が知られる『出雲国風土記』の内、最も古い写本の一つとされる「細川家本」(註24)では「寺。教昊寺」で書き出され、「新造院一所」と書き分けられている点を注意される。他の写本では、別の郡の新造院記載にも「寺」と追記されていたり、「寺。」と言う記載そのものが見られない場合も多いが、少なくとも細川家本では「寺」と「新造院」が区別されていたのではないだろうか。すでに多くの先学が指摘しているとおり、山林修行の拠点としての山林寺院は７世紀代からあると考えられており、また、国分寺僧であっても山林修行を行い、国分寺に伴う山林修行の拠点が整備されていた可能性(註25)も指摘されている。『出雲国風土記』記載の新造院(註26)の全てが山林寺院だったとは思えないが、組織としての寺院に付属する施設を「院」と呼ぶことは、現代でも普通のことであり、山林修行の拠点として整備されていた施設など、本寺から離れた付属施設を

「院」と呼んでいた可能性はないだろうか。想像をたくましくすれば、坊床廃寺や往生院跡も、古代においては独立した寺院ではなく、里の寺の坊院としての山林寺院だったと考えることはできないだろうか。

現在、澄水寺跡やその関連遺跡のある北山の尾根筋には自動車も通行できる林道が縦貫し、テレビアンテナやレーダーサイトなど様々な施設が作られている。こうした状況は澄水山周辺だけでなく、出雲市でも高野寺跡に隣接して林道とレーダーサイトが整備されるなど開発が進められている。こうした場所にも、実態の知られていない山林寺院の施設が展開していた可能性がある。また、『出雲国風土記』記載の山々についても、踏み込んだ検討が必要ではないだろうか。

〈註〉

註１　渡辺彝　『出雲稽古知今図説』成立年代不詳　天保または嘉永年間頃の成立か。

註２　珪道『出雲札所観音霊場記』寛政十（1798）年序、文化十一年（1814）刊 『松江市史　史料編５　近世Ⅰ』松江市史編纂委員会　2011年

註３　『持田村誌』持田村誌刊行委員会　1953年
なお、『持田村誌』には『出雲巡礼記』とあるが、その内容は『出雲札所観音霊場記』の記載内容そのもので、当時、『出雲巡礼記』と通称していたか。

註４　『島根県遺跡目録』島根県教育委員会　1962年

註５　椋木賢治「秘仏への旅－出雲・石見の観音菩薩像－」『秘仏への旅－出雲・石見の観音巡礼－』島根県立古代出雲歴史博物館　2008年

註６　『島根県歴史の道調査報告書第八集』島根県教育委員会　1998年
多根令己「出雲巡礼路を辿る」池橋達雄編『定本　島根県の歴史街道』2006年
品川知彦「出雲巡礼－巡礼路・供養塔・納札－」『秘仏への旅－出雲・石見の観音巡礼－』島根県立古代出雲歴史博物館　2008年

註７　岡崎雄二郎「松江市・澄水寺跡出土の陶磁器」『松江考古　第８号』松江考古学談話会　1992年

註８　島根県埋蔵文化財調査センター守岡正司氏の御教示を得た

註９　註７に同じ

註10　『出雲国分寺跡－総括－』松江市教育委員会　2016年

註11　近藤正「ＸＶ　松江近辺出土の陶製壺その他」『島根県埋蔵文化財調査報告書　第Ⅲ集』島根県教育委員会　1971年

註12　『菅田考古　第15号』　1979年

註13　『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ（海崎地区１）』島根県教育委員会　1987年

註14　伊藤徳広・稲田陽介・深田浩・丹羽野裕「恩田清氏採集試料の整理報告」『古代文化研究　第16号』島根県古代文化センター　2008年

註15　『史跡出雲国府跡－９　総括編－』島根県教育員会　2013年

註16　「枕木山縁起書」万治３年『修験道資料集Ⅱ』名著出版　1984年
藤岡大拙「出雲の山岳信仰」『島根地方史論功』　1987年

註17　註１・２に同じ

註18　『島根町誌　本編』島根町誌編纂委員会　1987年

註19　林が撮影した画像により、島根県立古代出雲歴史博物館学芸部長の的野克之氏の御教授を得た。

註20　西川津遺跡報告書では周辺の字を列記しており、これらの字を確認できる。註13文献

註21　須田勉「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢』早稲田大学出版部　1991年
上原真人「古代の平地寺院と山林寺院」『佛教芸術』265号毎日新聞社　2002年
後藤健一「山林寺院」『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』静岡県教育委員会　2003年
内田律雄「古代村落祭祀と仏教」『在地社会と仏教』奈良国立文化財研究所　2006年
久保智康「宗教空間としての山寺と社」『季刊考古学』第121号吉川弘文館　2012年
後藤健一「10世紀以降における山林寺院の展開諸相」『日本古代考古学論集』須田勉編　2016年
他多数。

註22　久保智康「古代出雲の山寺と社」『特別展覧会大出雲展』京都国立博物館　島根県立古代出雲歴史博物館　2012年

註23　『雲陽誌』大原郡寺領太林寺の説明に、「當寺より東に高山あり御室山といふ、中古旧跡なり、八町坂を登て絶頂に伽藍坊舎の礎異木怪岩をほし、乱世に彼寺院崩破して衆徒悉分散す、何代何年といふことしらす、其後此寺を建立して室山の観音を遷座し今の本尊とせり」とある。

『大日本地誌体系42　雲陽誌』雄山閣　1974年

註24　沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉『出雲国風土記』　株式会社山川出版社　2005年

註25　須田勉「国分寺と山林寺院・村落寺院」『国士舘史学』第10号　国士舘大学史学会　2002年

註26　久保智康氏は、山代郷（南北）新造院跡と考えられている来美廃寺・四王寺跡も茶臼山に関係する山林寺院に含められている。註22文献。

挿図番号	遺跡	種別	器種	法量(復元)		調整	胎土	焼成	色調	備考
2－1	澄水寺跡	越前焼	大甕	口径	(480)㎜	(外)ナデ (内)ナデ	1～3㎜の白色の砂粒を含む	良好	灰白10YR7/1	松江市教育委員会
2－2	澄水寺跡	越前焼	大甕			(外)ナデ・格子タタキ (内)ナデ	1～3㎜の白色の砂粒を含む	良好	灰白10YR7/1	松江市教育委員会
2－3	澄水寺跡	越前焼	大甕	底径	(212)㎜	(外)ナデ・工具痕 (内)ナデ	1～3㎜の白色の砂粒を含む	良好	灰白10YR7/1	松江市教育委員会
3	澄水山頂	宝筐印塔	傘部	高さ 幅	24cm 28cm					日引石？
4－1	往生院跡	瓦	平瓦	厚さ	30㎜	(凸面)ヘラ状工具による斜格子文 (凹面)布目圧痕	1～5㎜の白色・灰色の砂粒を含む	やや酸化炎焼成気味	灰白2.5Y8/2	松江市教育委員会
4－2	往生院跡	土師器	皿	口径 器高 底径	(98)㎜ 24㎜ (52)㎜	(外)ナデ・回転糸切り？ (内)ナデ	1㎜ほどの赤い砂粒を含む	良好	浅黄橙7.5YR8/6	松江市教育委員会
4－3	往生院跡	須恵器	長径瓶？	底径	(46)㎜	(外)回転ナデ・底部回転糸切り (内)回転ナデ	黄白色の小砂粒をわずかに含む	還元炎焼成され良好	灰7.5Y6/1	松江市教育委員会
5－1	坊床廃寺	瓦	軒丸瓦	瓦当面径	133㎜	(凸)縦方向のケズリ (凹)布目圧痕・糸切り痕・瓦当裏面に布目 笵の割れあり	1～2㎜の暗灰色の砂粒を含む	還元炎焼成	灰白5Y8/1	西川津資料
5－2	坊床廃寺	瓦	軒丸瓦			(凸)ナデ 瓦当面にわずかに布目状の圧痕がある	1～2㎜の白色の砂粒をやや多く含む	還元炎焼成	灰黄2.5Y6/2	西川津資料
5－3	坊床廃寺	瓦	軒丸瓦			瓦当面の低い部分にわずかに布目が見える ナデ	1㎜以下の白色の砂粒をやや多く含む	還元炎焼成	灰7.5Y5/1	西川津資料
5－4	坊床廃寺	瓦	軒丸瓦	瓦当厚	24㎜	(瓦当面)笵のずれがあり (瓦当裏面)布目圧痕	1～2㎜の黄白色の小砂粒を含む、5㎜ほどの大きな砂粒も含む	還元炎焼成だがやや軟質	灰白5Y7/2	西川津資料
5－5	坊床廃寺	瓦	軒丸瓦			(凸)縦方向のケズリ 笵の割れあり (凹)布目圧痕・糸切り痕・瓦当裏面に続く布目	1～2㎜の白色の砂粒をやや多く含む,黒灰色の2～4㎜の砂粒を少し含む	還元炎焼成	灰白5Y7/2	西川津資料
5－6	坊床廃寺	瓦	軒丸瓦			(凸)縦方向のケズリ (凹)布目圧痕・糸切り痕	白色の小砂粒を含む	還元炎焼成だが、やや軟質	灰白5YR7/3	西川津資料
5－7	坊床廃寺	瓦	軒丸瓦	丸瓦部厚	22㎜	(凸)縦方向のナデ (凹)布目圧痕・糸切り痕・面取り (瓦当裏面)ナデ・ヘラ状工具による押さえ痕 (側面)ケズリ	1～2㎜の白色の砂粒・5㎜以下の赤色の砂粒を含む	酸化炎焼成だが硬質	(凹)黄橙7.5YR7/8 (凸) 明黄橙10YR7/6	恩田資料 S44 5 □
6－1	坊床廃寺	瓦	軒平瓦	瓦当面厚 平瓦部厚	57㎜ 35㎜	(凸)縦方向のケズリ・顎部は横方向のナデ (凹)布目圧痕・瓦当近くは横方向の強いナデ	1～2㎜の白色の砂粒を含む	酸化炎焼成気味でわずかに軟質	灰白5Y7/2	西川津資料
6－2	坊床廃寺	瓦	軒平瓦	瓦当面厚 平瓦部厚	56㎜ 30㎜	(凸)縦方向のケズリ (凹)布目圧痕・瓦当近くは横方向のケズリ・側部面取り	1～2㎜の白色の砂粒を含む	還元炎焼成	灰白2.5Y8/2	西川津資料
6－3	坊床廃寺	瓦	軒平瓦	瓦当面厚 平瓦部厚	60㎜ 34㎜	(凸)縦方向のケズリの後ナデ (凹)布目圧痕・面取り・瓦当近くは横方向のケズリ	白色の小砂粒を含む	やや酸化炎焼成気味だが硬質	灰黄2.5Y7/2～浅黄橙7.5TR8/4	西川津資料
6－4	坊床廃寺	瓦	軒平瓦	瓦当面厚 平瓦部厚	58㎜ 39㎜	(凸)縦方向のナデ (凹)布目圧痕・横方向のナデ・側部面取り	1～2㎜の白色の砂粒を多く含む	還元炎	灰5Y6/1	西川津資料
6－5	坊床廃寺	瓦	軒平瓦	瓦当面厚 平瓦部厚	56㎜ 33㎜	摩滅により調整不明	1～2㎜の白色・暗灰色・赤色の砂粒を含む	還元炎焼成だがやや軟質	浅黄5Y7/4	恩田資料
6－6	坊床廃寺	瓦	軒平瓦	瓦当面厚	58㎜ 39㎜	(凸)縦方向のケズリ・笵の端部が見える (凹)ケズリの後ナデ	1～3㎜の白色の砂粒を多く含む	酸化炎焼成気味断面が赤変しており、2次焼成か	浅黄2.5Y7/4～黄灰2.5y5/1	西川津資料
7－1	坊床廃寺	瓦	軒平瓦	平瓦部厚	23㎜	(凸)縦方向のケズリ・顎部横方向のナデ (側面)ケズリ (凹)布目圧痕・面取り	1～5㎜の白色・灰色の砂粒を含む白色の砂粒を少し含む	還元炎焼成	灰白5Y7/2	恩田資料
7－2	坊床廃寺	瓦	軒平瓦	平瓦部厚	31㎜	(凸)摩滅のため不明 (凹)不明	1～3㎜の白色の小砂粒を少し含む	酸化炎焼成気味でやや軟質	淡黄2.5Y8/4	西川津資料
7－3	坊床廃寺	瓦	軒平瓦	瓦当面厚 平瓦部厚	56㎜ 29㎜	(凸)縦方向のナデ (凹)布目圧痕・瓦当近くは縦方向のケズリ	1～2㎜の白色の砂粒を含む	還元炎焼成	灰白7.5Y7/1	西川津資料
7－4	坊床廃寺	瓦	軒平瓦			(凸)縦方向のナデ	1～2㎜の白色の砂粒をわずかに含む	還元炎焼成	灰白2.5Y7/1	西川津資料
7－5	坊床廃寺	瓦	軒平瓦	瓦当面径 平瓦部厚	56㎜ 23㎜	(凸)縦方向のナデ (凹)ナデ・笵端の痕跡	1～3㎜の白色・暗灰色の砂龍を含む	還元炎焼成	灰7.5Y6/1	恩田資料

挿図番号	遺跡	種別	器種	法量(復元)		調整	胎土	焼成	色調	備考
7－6	坊床廃寺	瓦	軒平瓦	瓦当面厚	54㎜	(凸)縦方向のナデ・瓦当近くは横方向のナデ (凹)ナデ	白色の小砂粒をやや多く含む	還元炎焼成	浅黄2.5Y7/4	西川津資料
7－7	坊床廃寺	瓦	軒平瓦	瓦当面厚	52㎜	(凸)縦方向のケズリの後ナデ・顎部はナデ 瓦当面に木目目立つ	1～2㎜の白色の砂粒を多く含む	還元炎焼成	灰5Y5/1	西川津資料
7－8	坊床廃寺	瓦	軒平瓦			(凸)ナデ (凹)わずかに布目・瓦当近くはケズリの後ナデ	白色の小砂粒を含む	還元炎焼成だが、やや軟質	灰白5YR7/2	西川津資料
7－9	坊床廃寺	瓦	軒平瓦			(凸)横方向のナデ (凹)ナデ	白色の小砂粒を含む	還元炎焼成	灰白5Y7/1	西川津資料
7－10	坊床廃寺	瓦	軒平瓦			(凸)縦方向のケズリ・顎部は横方向のナデ 瓦当面に木目目立つ	1～2㎜の白色の砂粒を含む	還元炎焼成	灰5Y6/1	西川津資料
7－11	坊床廃寺	瓦	軒平瓦			(凹)布目圧痕・瓦当近くはナデ	1～2㎜の灰色の砂粒を少し含む	還元炎焼成	灰7.5Y6/1 断面は灰白7.5Y8/1	恩田資料
7－12	坊床廃寺	瓦	軒平瓦	瓦当面厚 平瓦部厚	59㎜ 32㎜	(凸)縦方向のナデ (凹)布目圧痕・瓦当近くは横方向のナデ	白色の小砂粒を含む	還元炎焼成だがやや軟質	浅黄2.5Y7/3	西川津資料
8－1	坊床廃寺	瓦	玉縁式丸瓦	厚さ	21㎜	(凸)ナデ・縄タタキをわずかに残す (凹)布目圧痕・糸切り痕	1～2㎜の白色の砂粒を含む	還元炎焼成だがやや軟質	(凹面端部)黄橙10YR8/6 (凹面)浅黄2.5Y7/3 (凸面)灰黄2.5Y7/2	西川津資料
8－2	坊床廃寺	瓦	玉縁式丸瓦	厚さ	22㎜	(凸)ナデ (凹)布目圧痕・わずかに面取り	1～4㎜の白色の砂粒をやや多く含む	酸化炎焼成でやや軟質	浅黄橙10YR8/4	西川津資料
8－3	坊床廃寺	瓦	玉縁式丸瓦	厚さ	33㎜	(凸)横方向のナデ (凹)布目圧痕	1～2㎜の白色の砂粒を含む。大きな砂粒を少し含む	還元炎焼成	灰7.5Y6/1	西川津資料
8－4	坊床廃寺	瓦	丸瓦	厚さ	21㎜	(凸)ナデ・わずかに縄目タタキを残す (凹)布目圧痕・糸切り痕・面取り (側面)ケズリ	1㎜ほどの白色の砂粒を少し含む	還元炎焼成	浅黄2.5Y8/3	恩田資料
8－5	坊床廃寺	瓦	丸瓦	厚さ	39㎜	(凸)縦方向のケズリ・わずかに面取り (凹)布目圧痕・糸切り痕・面取り (側面)ケズリ	1～5㎜の白色・灰色の砂粒をやや多く含む	還元炎焼成され非常に硬質	灰7.5Y5/1	恩田資料
8－6	坊床廃寺	瓦	丸瓦	厚さ	32㎜	(凸)縦方向のケズリ (凹)布目圧痕・絞られているように見える	1～5㎜の白色・暗灰色の砂粒を含む	還元炎焼成	灰白5Y7/2	恩田資料
8－7	坊床廃寺	瓦	丸瓦	厚さ	21㎜	(凸)丁寧なナデ (凹)布目圧痕・糸切り痕 (側面)ケズリ	1㎜以下の白色の小砂粒をわずかに含む	還元炎焼成	灰7.5Y6/1 (断面)灰白5Y8/1	恩田資料
9－1	坊床廃寺	瓦	平瓦	厚さ	24㎜	(凸)ハナレ砂・指頭圧痕・わずかに縄目タタキ (凹)布目圧痕・粘土板継ぎ目・面取り	1～2㎜の黒灰色・白色の砂粒を少し多く含む	還元炎焼成	灰5Y6/1	西川津資料
9－2	坊床廃寺	瓦	隅切り平瓦	厚さ	17㎜	(凸)荒い縄目タタキ・糸切り痕・指頭圧痕 (凹)布目圧痕・糸切り痕	1～2㎜の白色の砂粒を含む	還元炎焼成	(凸面)灰オリーブ5Y6/2 (凹面)灰白5Y7/2	西川津資料
9－3	坊床廃寺	瓦	平瓦	厚さ	20㎜	(凸)ハナレ砂・タタキ見えない (凹)糸切り痕・面取り (端面)不明	1㎜程の白色・暗胚移植の砂粒を含むほか、1㎝程もある青灰色の石を含んでいる	還元炎焼成	(凹)灰7.5Y5/1 (凸)灰白5Y7/1	恩田資料
9－4	坊床廃寺	瓦	平瓦	厚さ	25㎜	(凸)ハナレ砂(タタキ見えない) (凹)糸切り痕・粘土継ぎ目・面取り (端部)ナデ	1㎜程の白色の砂粒を少し含む	還元炎焼成	灰白5Y8/1	恩田資料
9－5	坊床廃寺	瓦	平瓦	厚さ	21㎜	(凸)ハナレ砂（タタキ見えない） (凹)糸切り痕・面取り (端部) 不明	1㎜程の白色の暗灰色の砂粒を含むほか、1㎝以上もある青灰色の石を含む	還元炎焼成	(凸)灰白5Y7/1 (凹)灰7.5Y5/1	恩田資料
9－6	坊床廃寺	瓦	平瓦	厚さ	28㎜	(凸)縄目タタキ・ナデ (凹)布目圧痕・縦方向の強いナデ・面取り (側面)ケズリ	1㎜程の白色の砂粒をやや多く含む	還元炎焼成	灰7.5Y5/1	恩田資料
10－1	坊床廃寺	瓦	平瓦	厚さ	22㎜	(凸)縄目タタキ・糸切り痕・ハナレ砂 (凹)布目圧痕・糸切り痕・面取り (側面)ケズリ	1～5㎜の白色・暗灰色の丸い砂粒を含む	還元炎焼成され硬質	灰黄2.5Y6/2	恩田資料

挿図番号	遺跡	種別	器種	法量(復元)		調整	胎土	焼成	色調	備考
10－2	坊床廃寺	瓦	平瓦	厚さ	23㎜	(凸)タタキ(無文か？)ハナレ砂 (側面)ケズリ (凹)布目圧痕・布目見えない	1㎜以下の白色の小砂粒をやや多く含む	還元炎焼成されるがやや軟質	(凸)灰7.5Y6/1 (凹)灰N5/ (断面)灰白5Y7/1	恩田資料
10－3	坊床廃寺	瓦	平瓦	厚さ	20㎜	(凸)縄目タタキ・糸切り痕・ハナレ砂 (凹)布目圧痕・わずかに糸切り痕・面取り (側面)ケズリの後ナデ	1㎜程の白色の砂粒を少し含む	還元炎焼成	灰白5Y7/2	恩田資料
10－4	坊床廃寺	瓦	平瓦	厚さ	22㎜	(凸)ハナレ砂多量・縄目タタキか (凹)糸切り痕	1～3㎜の白色で丸い砂粒を含む	還元炎焼成され硬質	灰5Y4/1 (断面)灰白5Y7/1	恩田資料
10－5	坊床廃寺	瓦	平瓦	厚さ	19㎜	(凸)縄目タタキ・糸切り(ハナレ砂見えない) (凹)布目圧痕・糸切り痕・面取り (側面)ケズリ	2～3㎜の白色の砂粒を含む	還元炎焼成され硬質	灰白5Y7/1	恩田資料
10－6	坊床廃寺	瓦	平瓦	厚さ	21㎜	(凸)ハナレ砂 (凹)ナデ・端部面取り (端面)ケズリの後ナデ (側面)ケズリ (側面)ケズリ	1㎜程の白色の砂粒を少し含む	還元炎焼成	灰白7.5Y7/2	恩田資料
10－8	坊床廃寺	瓦	平瓦	厚さ	22㎜	(凸)ナデ・深い面取り (凹)ナデ (側面)ケズリ	白色の砂粒をわずかに含む	還元炎焼成	灰白5Y7/1	恩田資料
10－9	坊床廃寺	塼	敷塼	厚さ	78㎜	(上面)糸切り痕・ナデ (側面)ナデ・板状の圧痕(型？) (下面)ナデ	白色・ガラス質の小砂粒を含む	還元炎焼成で非常に硬質	灰5Y5/1	恩田資料
10－10	坊床廃寺	塼	文様塼	幅 厚さ	97㎜ 16㎜	(表面)単弁蓮華文のネガティブ (側面・裏面)ナデ	1㎜ほどの白書の砂粒を少量含む	還元炎焼成だがやや軟質(瓦類とは違うか) スス付着	灰白N8/	恩田資料
11－1	坊床廃寺	土師器	坏	口径 器高 底径	152㎜ 53㎜ 58㎜	(外)回転ナデ (内)回転ナデ・底部回転糸切り	ほとんど砂粒を含まない	良好	浅黄橙7.5YR8/6	西川津資料
11－2	坊床廃寺	土師器	坏	口径 器高 底径	157㎜ 45㎜ 62㎜	(外)回転ナデ (内)回転ナデ・底部回転糸切り	ほとんど砂粒を含まない	良好	橙7.5YR7？6	西川津資料

坂本ルート沿いの一丁地蔵

坂本ルート沿いの巨石

坂本ルートの石段と巨石

尾根上にある勘助庵の碑

澄水寺跡（本堂跡近く）の無縫塔

澄水山山頂にある宝筐印塔

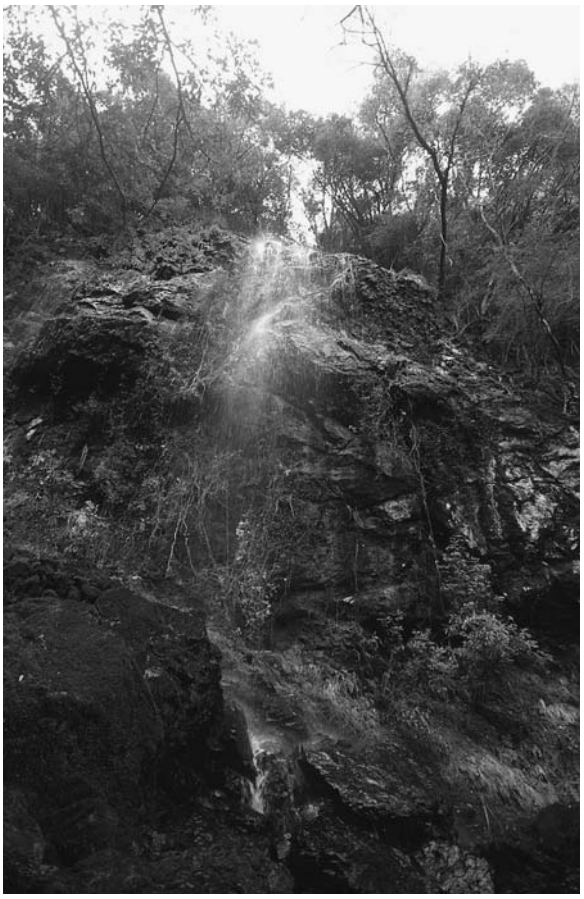
現在の澄水寺観音堂（長慶寺境内）

往生院跡

往生院跡の基壇と五輪塔

御手洗の滝の不動明王像（明治14年）

瀧の観音堂



御手洗の滝

坊床廃寺軒丸瓦（５－１）

坊床廃寺文様塼（10－10）